

法陳述の内容表現の多様性について

——体験話法を手掛かりに——

黒 沢 宏 和

0. 序

Hans würde „Don Carlos“ lesen, und dann würden sie etwas miteinander haben, worüber weder Jimmerthal noch irgendein anderer mitreden *könnte*! Wie gut sie einander verstanden! Wer wußte, —vielleicht brachte er ihn noch dazu, ebenfalls Verse zu schreiben? ... Nein, nein, das wollte er nicht! (Th. Mann)¹ (強調は筆者による)

この一節は、Duden 文法第4版の体験話法 (erlebte Rede) の例文であり、Th. Mann の „Tonio Kröger“ からの引用である。内気で社交性に乏しい少年トニオが、明るく、人気者のハンスと、なんとかして共通点を持ちたいと考える場面である。

浜崎氏は、斜字で記した „könnte“ は „konnte“ の誤りであり、もう20年間もそのまま今にいたっていると指摘され、「ある版の校正者が錯覚ないし先入観をもって „könnte“ にかえてしまったのだろう。」と述べられている²。

浜崎氏のこの指摘に触発されて、Duden 文法を初版から最新の第4版まで調べてみると、初版を除いて、それ以降の例は以下ようになる（初版は „Buddenbrooks“ からの引用である）。

初版 (1959年) Paul Grebe 編

2版 (1966年) Paul Grebe 編

／
„konnte“

3 版 (1973年) Paul Grebe 編 „könnte“

4 版 (1984年) Günther Drosdowski 編 „könnte“

初版から第 3 版迄は、Grebe が編者である。第 4 版から Drosdowski が編者になる。この表から明らかなように、第 3 版の「校正者が錯覚ないし先入観をもって „könnte“ にかえてしまった」ことがわかる。

すでに浜崎氏が指摘されたように、ここにはいわば二重の問題があるように思われる。つまり、まず第一に、Mann の意に反して „konnte“ が „könnte“ に、言換えれば直説法が接続法にかえられてしまったこと。第二に、第 3 版の誤りが第 4 版で訂正されずに、今日までいたっている点である。

過去の観点からの推量の常套手段である „würde“ の存在が、逆に体験話法の中の助動詞は接続法になって当然だ、という潜在意識をうえつけるのではなからうか、さらに問題の箇所は否定的内容なので、„könnte“ という接続法形を異としない環境でもある、というたいへん興味深い見解を浜崎氏は明らかにしておられる³。筆者もこれに概ね賛成であるが、この他にもまだ理由は考えられるように思われる。

そこで本稿では、この問題を出発点とし、体験話法における法(Modus)陳述の、内容表現にわたる諸問題を、時称(Tempus)の問題をも含めて考えてみたい。

1. 法

まず最初に、法から考察の歩をすすめたい。法はたいへん扱いにくいカテゴリーである為、その定義も困難である。例えば Bußmann は、「動詞の文法的カテゴリーであって、このカテゴリーを通して、その陳述によって表される事態に対する、話し手の主観的態度が表現される。」と定義している⁴。

そもそも法という文法概念は、近代語だけではなく、すでに古典語にも存在した。「法」のギリシャ語は *ἐγκλισις* であるが、ラテン語はこれに *modus* を当てた。ギリシャ語の *ἐγκλισις* が「ずれ、かたより」を意味するのに対し、ラテン語の *modus* は「方式、様式」の意味である。つま

り *ἐγκλίσις* に *modus* を当てた時点で意味は全く異なってしまったことになる。本来「法」は直説法を基準にして、そこからの「ずれ、かたより」をさす用語だったのである⁵。従ってドイツ語の *Modus* はラテン語からの借用なので、「法」本来の意味を正確には表しえないのである。

現代ドイツ語には三つの法、つまり直説法、接続法、命令法があるわけだが、歴史的経緯を踏まえた上で、本稿の内容と直接関係のある直説法、接続法に焦点を絞って考察をすすめたい。

Schmidt は直説法と接続法を次のように対比している。「直説法が事件や存在をすでに与えられたものとして、現実のものとして評価するのに対し、接続法は一般に陳述の、確実性の度合いが比較的僅かなことを表す。接続法は事件を単に前に置かれたものとして表現し、話し手に可能性や非現実に基づくニュアンスの形で、話し手の主観的判断を操作する、ということをも可能にするのである」⁶。

同様に Hentschel/Weydt は、直説法を強調されない形式 (*die unmarkierte Form*)、接続法を強調された形式 (*die markierte Form*) とみなしている⁷。

また Brinkmann は「視野 (*Horizont*)」という語を用いて、次のように両者を区別する。「直説法がすでに与えられたものとして評価するものは、経験 (現在形) の中で、あるいは回想 (過去形) の中で与えられる。直説法は (すでに与えられたものとしての) 話し手の視野の中に含まれているものを伝える。これに対し、接続法の形式の本来の機能というのは、それがその際区別しながら、その状況の中ですでに与えられたもの (このことは直説法によって伝えられる) に関係づけることによって、その視野を広げ、あるいはそれを踏み越えていく、ということである」⁸。

さらに Glinz は、直説法、接続法現在、及び接続法過去に、それぞれ固定した (*fest*)、仮定すること (*anzunehmen*)、ただ考えるだけのこと (*nur zu denken*) という特徴づけを行なっている⁹。

先に述べた歴史的経緯とこれらの見解を考慮すれば、法そのものの厳密な定義は別として、両者を次のように特徴づけできよう。

直説法は法に対して中立であり、その陳述は客観的である。これに対し接続法は、法からずれている為に、その陳述は主観的となる。また話し手

や書き手が直説法を用いれば、その陳述は現実として理解されるが、接続法を用いれば、単に想定されたとみなされ、可能性や非現実性を帯びた心の態度が表明される。

2. 体験話法における直説法

まず最初に、体験話法の文法的特徴を簡単に確認しておきたい。Duden 文法¹⁰によれば、体験話法は主人公の口には出さない思考や感情を表現するために用いられ、想定される直接話法から体験話法に変換する際には、語り手の視点によって、代名詞と時称が変換され、法はそのまま維持される、という。つまり、法に関して言えば、直接話法も体験話法も同じ法を使うことになる。

直接話法では、伝達者の存在は引用符によって明らかにされる。間接話法では、sagen や denken 等の伝達動詞 (Verba dicendi) がある場合、人称や状況語等の変換によって、そこから伝達者の影が読み取れるので、接続法は必ずしも必要ではない。これに対し伝達動詞がない場合、接続は不可欠となる¹¹。体験話法では、法が変換されない為に、人称や時称の変換が体験話法の目印となる¹²。

以上のことを踏まえ、ここで具体例に即して考究をすすめたい。尚、地の文と区別する為、体験話法に相当する箇所を斜字で記しておいた（以下すべて同様）。

- ① Tonio verstummte, und seine Augen trübten sich. *Hatte Hans es vergessen, fiel es ihm erst jetzt wieder ein, daß sie heute mittag ein wenig zusammen spazieren gehen wollten? Und er selbst hatte sich seit der Verabredung beinahe unausgesetzt darauf gefreut!* („Tonio Kröger“, S. 271)

『トニオ・クレーガー』の冒頭の部分に、上の箇所がある。学校が終わった後、トニオは車道で約束通りハンスを長い間待っていたが、当のハンスは他の仲間たちと一緒にそのまま帰ろうとする。ハンスは、一緒に散歩するという約束を忘れてしまったのではないかとトニオが考える場面である。

2行目の „ihm“ はトニオを、同じく2行目の „sie“ はトニオとハンスを、そして3行目の „er“ はトニオをそれぞれ指す。自分自身の思考部分であるにもかかわらず、3人称を用いている点から、1人称が3人称に変換されたことがわかる。

この箇所では、ハンスのトニオに対する疑惑の念が体験話法で表現されている。

② ... ein Zug seines Innern, ihm war noch nicht deutlich, wohin, beunruhigte ihn, er studierte Schiffsverbindungen, er blickte suchend umher, und auf einmal, zugleich überraschend und selbstverständlich, stand ihm sein Ziel vor Augen. *Wenn man über Nacht das Unvergleichliche, das märchenhaft Abweichende zu erreichen wünschte, wohin ging man? Aber das war klar. Was sollte er hier? Er war fehlgegangen. Dorthin hatte er reisen wollen.* („Der Tod in Venedig“, S. 458)

旅に出たいという衝動にかられたアシェンバハは、とりあえずアドリア海の、この数年来有名になったある島に逗留するが、やはり気に入らず、あれこれ思いをめぐらす。

斜字で記した体験話法部の „er“ はアシェンバハを指す。

ここでは、自分は、こんな島ではなく、最初からヴェニスへ行くべきだったのだ、という後悔の念が表現されている。

③ Es blieb still. Das Ruder plätscherte, das Wasser schlug dumpf an den Bug. Und das Reden und Raunen begann wieder: der Gondolier sprach zwischen den Zähnen mit sich selbst.

Was war zu tun? Allein auf der Flut mit dem sonderbar unbotmäßigen, unheimlich entschlossenen Menschen, sah der Reisende kein Mittel, seinen Willen durchzusetzen. Wie weich er übrigens ruhen durfte, wenn er sich nicht empörte! Hatte er nicht gewünscht, daß die Fahrt lange, daß sie immer dauern möge? („Der Tod in Venedig“, S. 466)

念願のヴェニスに着いたアシェンバハは、一隻のゴンドラを雇うが、愛想の悪い船頭に腹を立てる。

„der Reisende“ 及び „er“ はアシェンバハを指す。ここでは、せっかくヴェニスまで来たのに、なぜ些細なことで気分を害さなければならないのか、という自責の念が表されている。

- ④ Und Carlo lächelte auch. Ihm war, als könnte ihm jetzt nichts Schlimmes mehr geschehen, — weder vor Gericht, noch sonst irgendwo auf der Welt. — *Er hatte seinen Bruder wieder ... Nein, er hatte ihn zum erstenmal ...* („Der blinde Geronimo und sein Bruder“, S. 260)

兄カルロは子供の頃、弟ジェロニモの目を誤って失明させてしまう。そのためカルロはジェロニモの面倒を一生みることを決意する。ある日、ジェロニモは宿の客から、カルロに金貨を渡したと聞き、それを信じ込む。カルロはそれを否定するが、ジェロニモは全く聞き入れようとしない。止むを得ず、カルロは夜中に客の部屋に忍び込み、金を盗み出す。翌朝カルロはジェロニモを連れて遠くへ逃げようとするが、その途中で憲兵に捕まり、裁判所へ連行されてしまう。

この箇所は、この短篇の結末で、憲兵に連行される途中、ジェロニモは自分のことをやっとわかってくれたのだ、とカルロが胸をなでおろす場面である。

„Er“ はカルロを、„Bruder“ はジェロニモを指す。

すべてのことが終わったのだというカルロの満足感、安堵感が体験話法で見事に表現されている。

- ⑤ Er stand einige Minuten ganz unbeweglich, und dann begann der Erdboden mit ihm langsam auf und nieder zu gehen. Da merkte er, daß ihm die Augen zugefallen waren; und wie er sie öffnete, war ihm, als hätte er schon Stunden lang da geträumt und wachte nun erfrischt auf. *Daß sie schwer krank war, konnte er glauben, aber gefährlich, nein ... So jung, so schön und so geliebt*

... („Ein Abschied“, S. 138)

愛人のアンナが重病だと聞いたアルベルトは、是が非でも彼女の病状を知りたくなる。思案の結果、使いを雇って、彼女の家までやり、事の真相を明らかにしようと決意する。そして彼女の家から戻った使いの男から、やはり彼女の容体はかなり悪いようだと聞く。

„sie“ はアンナを、„er“ はアルベルトを指す。あのアンナが重病だなんて信じられない、というアルベルトの無念さが体験話法によって強調されている。

以上の実例を通じて、登場人物の口には出せない思考や感情が、読者に直接訴えかけられ、さらにそれらの思考や感情は、地の文に比べ、はるかに強いインパクトを持っている、と言えよう。

さて、ここで体験話法における直説法について考えてみたい。すでに述べたように、想定される直接話法から体験話法に変換する際に、法は変換しないので、直接話法でも体験話法でも同じ法を用いることになる。ここで注意しなければならないのが、直説法である。なぜなら、直説法が、登場人物の口には出せないような、いわば非現実の内容を表現することになるからである。例えば、実例の5では、「あのアンナが重病だなんて全く信じられない」という内容が体験話法で表現されている。また、実例1では「ハンスは僕との散歩の約束を忘れてしまったのか」というトニオの強い疑惑の念が表現されている。

さらに Hamburger によれば、「体験話法では、語りの機能は、いわば登場人物の中に消え、吸収されてしまい、その登場人物が自らを自発的に叙述しているのか、あるいは叙述されるのかは、もはや区別できない」¹³という。

この見解は、直接話法から体験話法に変換されても、法は変えられないという文法的観点からも十分に納得できよう。そしてこのことから、語り手の客観性が失われた描写は主観的にならざるを得ず、従ってその陳述も主観的となる、と言えよう。

以上の考察の結果、体験話法における直説法の陳述は、本来の直説法の陳述からずれ、非直説法的な陳述になってしまっている、と言えよう。

3. 体験話法に現われる接続法

さて、今度は体験話法における接続法について考えてみたい。繰り返し述べているように、直接話法から体験話法に変換される際に、法は変換されない。つまり、想定される直接話法において、接続法が用いられていれば、体験話法においても接続法がそのまま維持されることになる。

しかしながら、ここで取りあげるのは、直接話法からそのまま維持された接続法ではなく、いわば体験話法に突如現われてくる接続法である。この文法からみれば誤った接続法について、具体例に即して考えたい（強調は筆者による）。

- ⑥ *Sie müßte kommen! Sie müßte bemerken, daß er fort war, müßte fühlen, wie es um ihn stand, müßte ihm heimlich folgen, wenn auch nur aus Mitleid, ihm ihre Hand auf die Schulter legen und sagen: Komm herein zu uns, sei froh, ich liebe dich.* („Tonio kröger“, S. 286)

ダンスの講習会で屈辱を喫したトニオは、インゲが自分の傍へやって来て、傷ついた自分を慰めてくれることを心の中で切望する。„sie“ はインゲを指す。

ここでは接続法にすべき文法的必然性は全くない。„müßte“ を直接話法に戻せば、„muß“ になり、本来ならば、体験話法の中では „mußte“ になるはずである。

- ⑦ *Regungslos blieb er stehen, und es tat ihm wohl, zu denken, daß der Arzt bei ihr wäre. Er blieb lange aus ... Jedenfalls mußte noch irgend eine Möglichkeit zu retten da sein, sonst hielte er sich nicht so lange da oben auf. Oder sie lag schon in der Agonie ... Oder ... Ah, weg, weg, weg!* („Ein Abschied“, S. 141)

アルベルトが愛人のアンナの病状を思い浮べる場面である。医者が長い間往診しているので、まだ助かる見込みがあるだろうと推測する。

冒頭の „Regungslos blieb er“ の „er“ はアルベルトを、体験話法中

の „er“ は医者を, „sie“ はアンナをそれぞれ指す。ここでも接続法にする必要はないと思われる。ただし „mußte“ を直説法のままで, „hülte“ のみを接続法に変えているところが興味深い。普通ならば, 浜崎氏も指摘されているように, „mußte“ を接続法にして, „hielte“ を直説法のままにしておくだろう。この箇所を直接話法に戻せば, „Jedenfalls *muß* noch irgend eine Möglichkeit zu retten da sein, sonst *hält* er sich nicht so lange da oben auf.“ となるが, 察するところ, 「そうでなければ医者がそんなに長い間いるはずがない」という気持ちをさらに強調するために, 敢えて接続法に変えたのではなかろうか。

- ⑧ *Er mußte sie ja noch einmal sehen, auf irgend eine Weise ... ja, er konnte sie doch um Himmels willen nicht sterben lassen, ohne sie noch einmal gesehen zu haben. Das wäre zu entsetzlich!* („Ein Abschied“, S. 143)

アルベルトは, アンナが死ぬ前に, もう一度会いたいと思う。最後の一文には, 「彼女に会う前に彼女が死んでしまったら」というような非現実的なニュアンスが含まれているために, 接続法が出てきてもおかしくはないと感じられる。しかしながら, この箇所を直接話法に戻せば, あくまでも, „Das ist zu entsetzlich!“ である。ここでは *entsetzlich* を修飾する副詞の „zu“ が付け加えられているので, 本来表現としては十分なはずである。ただ, „Das **wäre** zu entsetzlich!“ と „Das **war** zu entsetzlich!“ を比べてみた場合, 文法から外れることにはなるが, 接続法を用いたほうがインパクトがより強いように思われる。

すでに述べたように, 浜崎氏は, „würde“ の流用癖が嵩じて体験話法の中では, 助動詞は接続法になって当たり前という認識がうえつけられるのではないかと指摘されたが, 文体的な, つまり読者に与えるインパクトという観点からすれば, さらに違った解釈もできるのではなかろうか。

4. 体験話法における時称の問題

4.1. 法と時称

さて、ここで今までとは視点を変え、法と時称という観点から体験話法における時称の問題について考えてみたい。

周知のごとく、インド・ゲルマン語以来、法と時称は常に密接な関係にあった。例えば、コラルの『ラテン文法』¹⁴には、直説法は微妙な時間的前後関係を位置づける、という記述がある。これに対し接続法は、時間関係が流動的な法であって、法としての機能が、接続法の〈テンス〉という語が当然表すはずのテンスの概念をしばしば押しつぶしてしまう、と記述されている。

この現象は、ラテン語だけにあるものではなく、多かれ少なかれ現代ドイツ語にも同じような法と時称の関係が存在する。Hentschel/Weydt¹⁵は、法と時称は同じ動詞形式の中では同時には強く表現されえず、もし接続法があれば、それが時称の機能を背後に押しやってしまうと述べ、次のような例文を挙げている。

Ich wünschte, er käme endlich.

Ich wollte, ich wäre reich.

さらに両氏は、接続法が時称を背後に追いやってしまうこの現象は、このような願望文(Wunschsätze)で接続法過去を用いる場合に明白になり、そこでは過去時称にも拘らず、過去とのつながりを示すのではなく、むしろ現在(ないし未来)と結びついている、と説明を加えている。

繰り返し述べたように、直説法は法に対して中立であり、客観的である。これに対し接続法は、主観的である。従って、時称との関係に対しても、客観的に描写するのが直説法である。これに対し、主観性が先行するあまり、時間的な関係を客観的に描写できないのが接続法となる。

以上のことを踏まえて、次に体験話法における時称の問題を具体例に即して考えてみたい。

4.2. 体験話法における直説法過去形

直接話法から体験話法に変換される際に、人称と時称が変換されるわけであるが、時称に関して他の言語(フランス語と英語)と比較しつつ図で

示すと、下図のようになる¹⁶.

	direkte Rede	erlebte Rede
Deutsch	Präsens	Präteritum
	Perfekt	Plusquamperfekt
	Futur	„würde + Inf.“
Französisch	Présent	Imparfait
	Passé composé	Plus-que-parfait
	Futur	Conditionnel
	Futur II	Conditionnel II
Englisch	Present Tense	Preterite
	Perfect	Pluperfect
	will/shall + Inf.	would/should + Inf.

この表からも明らかなように、三つの言語を通して現在形は過去形に、完了形は過去完了形に変換されることがわかる。ただし、ドイツ語の直説法には、語りの時称として未来に対応できるような、いわゆる「過去未来」(Futur des Präteritums) の用法が欠けているので、止むを得ず接続法で代用しているのである¹⁷。尚、この „würde + Inf.“ に関しては、すでに報告されているので、言及を止めたい¹⁸。

さて、次に体験話法における過去形の問題点について考えたい。例えば Hamburger によれば、フィクションでは「過去形は過ぎ去ったことを表すというその文法的機能を失っている」という¹⁹。果たしてこの記述が体験話にあてはまるかどうか、具体例に即して検証したい(強調は筆者による)。

- ⑨ Geronimo hob die Gitarre vom Boden auf, ohne ein Wort zu sprechen. Carlo atmete tief auf und legte die Hand wieder auf den Arm des Blinden. *War es denn möglich? Der Bruder zürnte ihm nicht mehr? Er begriff am Ende —?* („Der blinde Geronimo und sein Bruder“, S. 260)

金を盗みだしたカルロは、翌朝ジェロニモを連れて遠くへ逃げようとするが、憲兵に捕まり、裁判所に連行されてしまう。

ここでこの箇所の日本語訳を援用する²⁰。「一体、こんなことがありうることだろうか。弟はもう自分のことをおこっていないのかしら。弟はとうとう分ったのかしら—？」

- ⑩ Er war völlig verzweifelt; das war nicht mehr zu ertragen — das beste: fort, fort — dieses Glück **war** doch zu teuer bezahlt! ... Oder er **mußte** wieder eine Änderung treffen — z. B. nur eine Stunde warten — oder zwei — aber so **konnte** das nicht weiter gehen, da **mußte** alles in ihm zu Grunde gerichtet werden, die Arbeitskraft, die Gesundheit, schließlich auch die Liebe. („Ein Abschied“, S. 133)

アルベルトは、アンナとなかなか会うことができない為に、憂鬱な毎日を送っていたが、こんなことならいっその事、彼女と別れてしまおうかと考える。

上例と同様に日本語訳を援用する²¹。「一番いいことは、やめることだ。やめることだ。—この幸福は余りに高すぎる…そうでなければ、何か別な方法を立てるより仕方がない…(以下省略)」

ここでも過去形は、その文法的機能を完全に失っている。

この考察の結果から、Hamburger が指摘した通り、体験話法の中では、過去形は過ぎ去ったことを表すという文法的機能を失ってしまい、もはや形式的に過去形が用いられているにすぎない、と言えよう。

さて、ここで先に述べた法と時称との関係を振り返ってみると、直説法は時間に対して厳密であったはずである。ところが、体験話法の中では、直説法過去形がその文法的機能を失っているのである。言換えれば、体験話法の中では、直説法が用いられているにもかかわらず、時間を正確に表していないのである。

無論、体験話法の中では現在形も現われうるが、今述べたことを考慮すれば、体験話法中の直説法の陳述は、時称の面からみても、その本来の陳述からずれている、と言えよう。

5. ま と め

これまでの考察の結果、非直説法的な陳述内容、もはや過去を表さない過去形という理由で、体験話法における直説法の陳述は、本来の直説法の陳述から大幅に逸脱し、むしろ接続法の陳述内容に近い、と言えよう。

さらに、このことと関係して、体験話法中の直説法は、接続法に変えられると、より一層インパクトが強力になるのではなかろうか。なぜなら、接続法を用いることによって、直説法では表現できない可能性や非現実性を帯びた心的態度が付加されるからである。

最後に、本稿の冒頭に挙げた Duden 文法の中の „konnte“ が „könnte“ に書き換えられた問題に触れておきたい。 „würde“ の流用癖が嵩じて、その影響が助動詞にまで波及し、さらにはその否定的表現内容からしても „könnte“ がでてきてもおかしくはない、というのが浜崎氏の見解である。筆者もこの見解に概ね賛成であるとすでに序で述べたが、例えば実例 7 の „hielte“ や実例 8 の „wäre“ はこの見解ではうまく説明できない。

察するところ、この問題は体験話法の表すインパクトと深い関わりがあるものと思われる。体験話法が地の文に比べ、はるかに強いインパクトを持っている、ということは、実例を通じて考察した通りである。さらに強力なインパクトを読者に与えようとする際に、作家は敢えて文法的逸脱を犯しても直説法を接続法に変えてしまうのではなかろうか。この際、直説法の表す陳述が接続法のそれに近いという感覚が、作家の「衝動」を助長することは想像に難しくないだろう。たまたま Duden 文法では、第 3 版のある校正者が Mann の代わりにこの役を務めたことになる。いずれにせよ、第 4 版でこの誤りが訂正されなかったという事実は、ドイツ語としては „könnte“ でもおかしくない、ということの証明になろう。

ともあれ、人間の思考と密接に結びついている「法」の問題を、文法だけで割り切るのはかなり難しいように思われる。そもそも体験話法自体、厳密に言えば文法から外れているわけだが、作者の意に反して „konnte“ が „könnte“ に変えられることによって、やや誇張して言えば、二度過ちが犯されることによって、その陳述内容が正しくなり、延いてはそのインパクトもさらに強くなるという現象は、文法的な皮肉と言え

ようか.

テ キ ス ト

- Mann, Thomas: Tonio Kröger. In: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden.
Band VIII. Fischer Verlag. 2. Aufl., 1974.
- ders.: Der Tod in Venedig. In: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden.
Band VIII. Fischer Verlag. 2. Aufl., 1974.
- Schnitzler, Arthur: Der blinde Geronimo und sein Bruder. In: Gesammelte
Werke von Arthur Schnitzler in zwei Abteilungen. Erster Band. Fischer
Verlag. 1922.
- ders.: Ein Abschied. In: Gesammelte Werke von Arthur Schnitzler in zwei
Abteilungen. Erster Band. Fischer Verlag. 1922.

注

- 1 Duden: Grammatik der deutschen Gegenwartssprache. 4. Aufl., 1984.
S. 173.
- 2 浜崎長寿: 「Duden 文法の erlebte Rede のことなど」『会誌』2・3合併号
(阪神ドイツ語学研究会) 1991年, 8ページ.
尚, その他の Duden 文法の記述の誤りに関しては, 以下の文献を参照された
い.
1. 保坂宗重: 「Duden 文法第3版と『体験話法』」『ドイツ語教育部会会報』
第6号(日本独文学会ドイツ語教育部会) 1974年, 50~53ページ.
2. 鈴木康志: 「一人称体験話法と内的モノローグ——Duden 文法第4版の記
述をめぐって——」『ドイツ語教育部会会報』第32号(日本独文学会ドイ
ツ語教育部会) 1987年, 42~46ページ.
- 3 浜崎長寿: 前掲書. 9~10ページ.
- 4 Bußmann, Hadumod: Lexikon der Sprachwissenschaft. Stuttgart, 2.
Aufl., 1990. S. 496.
- 5 シャルル・ギロー著, 有田潤訳『ギリシャ文法』白水社(文庫クセジュ) 1970
年, 151ページ.
- 6 Schmidt, Wilhelm: Grundfragen der deutschen Grammatik. Berlin,
1967. S. 228.
- 7 Hentschel, Elke/Weydt, Harald: Handbuch der deutschen Grammatik.

- Berlin・New York, 1990. S. 106f.
- 8 Brinkmann, Hennig: Die deutsche Sprache. Gestalt und Leistung. Düsseldorf, 1962. S. 352f.
 - 9 Glinz, Hans: Die innere Form des Deutschen. Bern, 6. Aufl., 1973. S. 108f.
 - 10 Duden Grammatik, a. a. O., S. 173f.
 - 11 Flämig, Walter: Zur Funktion des Verbs II. Modus und Modalität. In : Deutsch als Fremdsprache, 1/1965. S. 5.
 - 12 Steinberg, Günter: Erlebte Rede. Ihre Eigenart und ihre Formen in neuerer deutscher, französischer und englischer Erzählliteratur. Göttingen, 1971. S. 357.
 - 13 Hamburger, Käte: Die Logik der Dichtung. Stuttgart, 3. Aufl., 1977. S. 142.
 - 14 ジャン・コラル著, 有田潤訳『ラテン文法』白水社(文庫クセジュ)1968年, 129~135ページ.
 - 15 Hentschel/Weydt, a. a. O., S. 110.
 - 16 Steinberg, a. a. O., S. 360f. の記述に基づき表を作成した.
 - 17 Ibid., S. 361.
 - 18 体験話法における „würde+Inf.“ に関しては以下の文献を参照されたい。
Herdin, Elis: Würde+Infinitiv als Indikativ Futuri praeteriti gebraucht. In: Zeitschrift für deutschen Unterricht 17 (1903), S. 191~208.
鈴木康志: Würde+Infinitiv in „*Wo warst du, Adam?*“——Zur These von Elis Herdin——.『言語文化論集』第27号(筑波大学)1988年, 27~40ページ.
保坂宗重: Elis Herdin の体験話法研究(1)『茨城大学教養部紀要』第21号, 1989年, 441~456ページ.
 - 19 Hamburger, a. a. O., S. 61.
 - 20 アルトゥル・シュニッツラー 著, 山本有三・相良守峯共訳『シュニッツラー選集』第一巻, 実業之日本社, 1951年, 158ページ. 尚, 歴史的仮名遣は現代仮名遣に訂正した.
 - 21 同上書, 10~11ページ.

Zur Differenzierung der Modusaussage bei inhaltlichen Ausdrücken

— in Hinsicht auf die erlebte Rede —

Hirokazu KUROSAWA

Hans würde „Don Carlos“ lesen, und dann würden sie etwas miteinander haben, worüber weder Jimmerthal noch irgendein anderer mitreden *könnte*! Wie gut sie einander verstanden! Wer wußte, — vielleicht brachte er ihn noch dazu, ebenfalls Verse zu schreiben? ... Nein, nein, das wollte er nicht! (Th. Mann) (aus: Duden-Grammatik, 4. Aufl., S. 173. Hervorhebung vom Verfasser)

Diese Sätze sind ein Abschnitt aus Th. Manns „Tonio Kröger“. Sie sind in erlebter Rede geschrieben.

Nagatoshi Hamazaki weist darauf hin, daß dieses „könnte“ ein Fehler von „konnte“ sei, die Form vor 20 Jahren durch irrtümliche Emendation in den Text gelangt und seither so belassen sei.

Er äußert auch die interessante Ansicht: „würde“ erwecke in uns als häufige Form der Vermutung (aus der Vergangenheit heraus) das Gefühl, die Modalverben müßten in der erlebten Rede mehr oder weniger im Konjunktiv stehen. Die betreffende Stelle habe zudem einen negativen Inhalt, um so weniger halte man den Konjunktiv „könnte“ für unnatürlich.

Zwar stimme ich größtenteils dieser Meinung zu, aber es scheint mir, noch andere Deutungen bleiben übrig.

Ich gehe von diesem Problem aus und möchte dabei inhaltliche Ausdrücke der Modusaussage zur Diskussion stellen.

Erstens : Wir charakterisieren im folgenden den Indikativ und den Konjunktiv.

Der Indikativ ist der neutrale Modus, und dessen Aussage ist objektiv. Demgegenüber schweift der Konjunktiv von den Modusbegriffen ab, und dessen Aussage ist subjektiv.

Zweitens : Betrachtungen der Modusaussage in der erlebten Rede führen im Hinblick auf diese Charakterisierung zum folgenden Ergebnis.

- 1) Die Aussage des Indikativs in der erlebten Rede nähert sich dem Aussageinhalt des Konjunktivs, weil der Indikativ von der eigentlichen Aussage abweicht und das Präteritum das Vergangene nicht mehr bezeichnet.

Im Gegensatz zur Ansicht von Hamazaki steht der Konjunktiv in der erlebten Rede nicht immer in den Modalverben, und er hat auch stärkeren „Impact“ als der Indikativ. Wir können sagen :

- 2) Der „Impact“ des Indikativs in der erlebten Rede wird noch stärker, wenn man ihn in den Konjunktiv transformiert, weil eine Stellungnahme mit der Nuance von Potentialität und Irrealität beim Konjunktivsgebrauch hinzugefügt werden kann.

Man könnte dann über den obengenannten Fehler in der Duden-Grammatik auch im folgenden sagen, daß „konnte“ in „könnte“ transformiert wurde, um den „Impact“ zu verstärken.